

藤森： 僕がここまでやってるのにまだ満足してない、もっとやった。でもってというのが降り積もって自分がキレちゃう、それが失敗。あるとき気がついたんですね。妻はそんなこと求めてるわけじゃなくて、妻がどんだけ大変な思っているのかわかってほしい。話を聞いてあげるだけでいいのに、僕はなんか自分のことばかり考えていた。あるとき気がついて、僕はそうだと妻のサポーターになればいいんだって思ってから、少し自分としては気が楽になりました。

勝浦： やってないお父さんは奥さんがあきらめて何にもいわれないのに、なまじやると失敗してしまう。私も経験あるんですけど、週に1回送り迎えすると夫はすごい大きい顔するわけですよ。毎日の送り迎えは一体誰がやってるんだよってなるわけ、そういうことですよ。

田中： あの、今まさに同じようなことを思ってます、私も仕事が比較的遅いほうなので、平日あまり手伝いできない。でもたまに早く帰ってきて血洗いすると、洗いきれてない、汚れがついてる。それで、それを妻に言われる、ダメ出し。私は妻に対しては、「そこは夫をいかに気持ちよく働かせるか、それが妻の腕だよ」って言ってですね。それで、言い方として、まず「ありがとう」と言ってくれて、その上で「ちょっと汚れついてたけど次回からちゃんととってね」って言えば、僕も単純なんで、乗せられて次は血洗いだけじゃなくて洗濯もやっちゃうかも、となる。

最初の「育児に参加しますか?」というところで私もふと思ったんですが、「家族サービス」という言葉あるじゃないですか。その言葉、実は私がいつも妻と違和感あるよねって話してます。結構「家族サービス」って言葉を日常的に使う方が多かったり、マスコミとかでも使ったりすることがあります。あくまで家族の一員である、っではじめから感じていれば、そういう言葉は使わないんじゃないかと私は思います。

勝浦： 皆様方から同じような質問がたくさん出ています。「家事育児をあまり手伝わないお父さんに、どうやったら気持ちよく参加してもらえるのか?」、坂本さん何かこうコツがございますか?

坂本： 豚もおだてれば木に登る、じゃないですが、おだててあげる。お母さんも最初から上手にオムツ換えができたわけじゃないし、赤ちゃんの泣き声を識別できたわけじゃないですよ。ビギナーは下手で当然。経験を積むしか上手になっていかないわけですから、初めてお父さんがやるときは下手でも、「あ、もう下手くそだから」って言わない。ちょっとまあ、失礼な言い方かもしれませんが、夫より利口になることが重要です。「まあ、うまくやってくれてありがとう」って、「子どもも喜んでるわ」って感じにほめる。まあ 40点かなあなんて思っても、そこは子どもにも我慢してもらって。そうやっていくとパパも育児が段々上手になって、喜んでくれる。

新座子育てネットワークでは海外と父親の子育ての研究をしていて、カナダの父親支援の取り組みも長年研究しています。「ゲートキーパー」という言葉がカナダにはあるんですね。夫のやり方が下手くそだったり、子育ては自分の仕事って決め込んで、夫に手出しをさせない母親を「ゲートキーパー」、門番っていうんですね。立ちはだかってしまう。それはやっぱりすごく下手な子育てのやり方です。最初は下手でもやってもらって、パパも子育てすることで段々慣れて、親として育っていくのを待ちましよう母親たちにアドバイスします。

妻がいけないのは、最初は私のほうが上手だから、私の仕事だからって取り上げるんです。けど、2,3年たったら「うちの夫は何にもやってくれない」と言い出す。ですから、その罫に夫もはまらないように、間隙を縫って経験を積んでいってくださいと助言しています。

勝浦： ありがとうございます。いかがでしょう、金子さんは気持ちよくなさっていらっしゃる方ですか?

金子： そうですね、褒め上手な妻です。僕、両親学級に行ったときに、一緒に来てた他の男性の方が、おむつをつけるのを奥さんに「下手くそね」って言われてた。そしたら、もう二度とやらないって怒ってました。「じゃあ、お前やれよ」って言ってましたね。で、うちの奥さんは、僕のをすごく褒めてるんです。「えー、こんなに上手にできるの」って。あと、困ったふりをしてくれるとすごい参加しやすい。かわいく「助けて」って言える奥さん。

坂本： そこにはね、愛があるんだと思うんですよ。夫婦の愛があるから、金子さんもやりたいと思えて、妻も「がんばって」と言えるんだと思います。

勝浦： ここにいらっしゃってるお父様は、意識の高い方だと思います。うちの夫を何とかしたいと思ってらっしゃる奥様、ここはこらえて、おだてると。何でおだてなきゃいけないんだよとも思いますけど。

藤森： でもね、ダメ出しされると終わっちゃう。洗濯物とか干して畳むじゃないですか。「何この畳み方、二度手間じゃない」とか言われたら二度とやるもんかと思えますからね。やっぱりおだててもらっていい気持ちになれば、俺ってなかなかやるよなって。



NPO法人 ファザーリング・ジャパン 藤森新五氏

勝浦： 今のね、すごくわかりましたね。人間関係って正論だけではなかなか動かない。やっぱりどうやっていい人間関係をつくっていくか、その工夫なんですよ。それがうまくいってらっしゃるのが金子さんのところ、それだけの結果を出してらっしゃる。

金子： そういう意味では、妻の方が賢いって話なんですけど、男はいい意味で馬鹿にならなきゃダメですよ。

坂本： 子どもはお父さんとお母さんが仲良くしているのが一番幸せなんです。だから、家の中で子どもを間にむきになって、やりあう姿を見せないことも、大人の子どもに対する大切な配慮です。

勝浦： 役割分担についての質問があるんですけど、特に何か役割分担でお話なさることありますか。奥様とご主人の役割分担。

藤森： うちの場合は、気がついた方がやるって感じですね。やることが山のようにありますから。子どものこともそうですし、家のこともそうですし、気がついたほうがどんどんやっていかないと、こなせないです。

田中： 家事だけじゃなくて、例えば子どもに対する接し方として、私は基本的に体を動かすのが好きなので、そういうことは私がやったり、妻が得意なことについては妻がやる。至極当たり前の話なのかもしれませんが、そういう感じで…。

金子： 子どもの成長とともに、子どもに対して父親がした方がいいことって、たぶん時期によって変わってくと思うんですよ。その辺は臨機応変で、うちの子は2歳3カ月にもうすぐなりますけど、今の時期は、お風呂と読み聞かせですか。寝付かせも最近は僕がやるようにして…。やっぱその辺も変わってきてますね。

勝浦： おっしゃるように、役割は子どもの年代によっても違います。中にこういう質問がありました。「子どもを叱るときにしか、妻に呼ばれない父です。そのため子どもがやはりどこか私に対して怖いイメージしかないようで、なかなか来てくれません。どのように子育てに参加すればいいでしょう?」これ結構、大事な問題ですよ。これまずいです。では藤森さん、何でもこれがまずいんでしょうか。

藤森： 何かの役割だけってのはまずいですよね。だから、お父さんももっと関わりたいんですよ、きっと。

勝浦： やっぱりね、楽しい経験をとお父さんとさせてあげなきゃ。

藤森： 愛されてるってことを感じさせない。

勝浦： 犬をしつけるトレーナーが、一番最初にすることはなんだと思いますか。それは、一緒に遊ぶことなんです。一緒に遊んで楽しい経験をすることで信頼関係が育ちます。それからしつけるんですよ。そうすると、愛があるしつけということになるんですよ。

だから、叱るときにしか呼ばれないのではしょうがないので、やっぱり子どもと楽しい時間を過ごす。体を使って遊ぶのが得意なお父さんは、すぐ子どものヒーローになれるんですよ。子どもは、お父さんと遊ぶの大好きだから。でも、お父さんの中には、アウトドアが苦手な人もいる。公園にいった遊んでも、あなた下手ねって奥さんに怒られてるお父さんもいるんですね。そうした場合には、なんでもいいので、一緒にちょっと子どもと楽しく過ごす時間をつくってほしい。

一緒に手をつないで買い物にいくだけでいいんですよ。それから筋力はね、平均的にお父様のほうが絶対にある。だからちょっと高い高いをやってみるとかね。それから公園とかに行くと、遊び上手なお父さんがいるから、その真似をしてみるとか。やはりいろんな関わりをした方がいいと思います。ですから、叱るときしか呼ばれないお父様の奥様には、どうやって楽しい時間を持てるかをお考えいただいたらいと思います。

「仕事が忙しく留守がちなお父さんは、どのように子どもとコミュニケーションをとったらよいのでしょうか?」の質問には、いかがでしょうか。

金子： いなければ…。もうそれはあんまり会えないということが前提ですよ。あんまり会う時間がないってことですよ。

藤森： 早く帰ってきましょう。よく言うんですけど、仕事の代わりはいくらでもあります。僕もそうですけど、その方の代わりも多分います。よっぽどカリスマ経営者じゃない限り。カリスマ経営者でもサイボウズの青野さんは育休とりましたけど、仕事の代わりなんていくらでもいるんですよ。だけど、父親の代わりっていないので、もう早く帰りましよう僕は思ってます。

金子： 今は、メッセージを送るとか、映像とか撮れるじゃないですか。遅くなる時には、携帯電話でテレビ電話もできますし、そういうのもいいのかもしれないですね。

勝浦： やはり仕事をしないと会社をクビになってしまうという現実もあります。お父さんの代わりはないって、確かにそうなんです、大切なのはお父さんが積極的に育児に参加できるような職場環境ですよ。「職場にどんな働きかけをしていけばいいのか教えてください」というご質問です。

田中： これは、意識を変えなければいけないと思うんですね。私は平成21年の1月に長女が生まれまして、そのときには育児休職を取り、実際3週間ほど休みました。育児休職をとろうと思ったきっかけは、妻が妊娠してしばらく経ったときに、妻の出産に立ち会いたくなったからです。妻がいわゆる「里帰り出産」だったので、陣痛がきてからじゃ間に合わない、そのためにはある程度まとまった期間の休みがないとちょっと立会いが難しいかなあなんて話

を会社でして、そんなところから育児休職の話が出てきたんです。実際に育児休職を取ろうとしたときに、弊社の場合は今まで誰ひとり取ったことがなかったので、その期間私の仕事に穴が開く部分をどう埋めるのか。そもそもそれぞれの人が何をやってるのがわかるように情報共有をして、一人いなくなっても他の人が穴埋めをできる体制をつくるだとか、業務の効率化をやってみようということになった。育児休職だけでなく、突発的に誰か休むことってあるじゃないですか。そういうときでも対応ができるようにしていったのです。逆にそういうことができない職場だと、夜遅くまで残業ばかりになってしまったり、帰れないとか、休みも取れないという流れになってしまう。



ジャトコ株式会社 田中正史氏

勝浦： すばらしいお話ですよ。これは父親の環境もそうだし、母親もそうだし、みんなで仕事の内容を共有していくことで、スムーズになっていく。それをやっていくことが第一歩の働きかけということですよ。担当者いないから、また明日来ようみたいなことがよく世の中にはありますものね。

藤森： 職場の人にも言っておいた方がいいですよ。育児休暇をとるためにも、「こんだけ大変なんだよ、子育てですごく大変」と普段から周りに認知してもらおうと、割と休みやすかったりする。

坂本： グローバルな企業、特に海外では職場のデスク周りに家族の写真が普通に飾ってあったりするんですね。いろんな企業で父親の研修をすると、家族や子どもの話を職場でほとんどしない所が圧倒的に日本は多いですよ。海外の人は、みんなやっぱり家族の話をざり気なくしてるんですね。普段から子どものことを職場で話しておく、体の弱いお子さんだったりすると、「そういえば…」と、職場の仲間も協力しやすい。だから、我が子の成長のプロセスの話を少ししておいて、子どもに何かあったときには、みんなが応援できるようにしておく。職場仲間も子育てにちょっと巻き込んでいくようなアプローチを職場でもするべきだと思いますね。

勝浦： おっしゃるとおりですね。会社で子育ての話をすると、母親の場合でも「職場に家庭を持ち込んで」ってなるし、まして父親は男なので、会社で家庭の様子を見せるなみたいなのがありますよね。でもそれでは今の時代はやっていけない。実はちょっと昔も子育てと仕事を両立してやっていたのです。社会の一番大事なことっていうのは、みんなで子どもを育てて次の世代を作ることですよ。なるほど、そうやって理解を得ていくということですね。すごく大きなテーマですよ。

坂本： 北欧などの両立支援が当たり前になっている国の人たちは、出産休暇とか育児休暇っていうのは、妊娠した段階からわかるので計画しやすい。介護などは突然、認知症が始まったり、倒れたりと予測不能なので、それに比べればずっと導入しやすいと言います。

勝浦： おっしゃるように、出産への対応はかなり計画的にできますものね。ここでリハーサルしてがんばっておくことが、他の場合にも大変プラスに